

キウス周堤墓群

周堤墓の成立と終末の中で

高橋 理

千歳市埋蔵文化財センター長

巨大な構築物

千歳の市街から国道337号を北へ八キロほど、馬追丘陵の西の麓の旧馬追・長都沼に向う緩やかな斜面がある。北海道横断自動車道のガードをくぐると道路の前方に鬱蒼とした林が見えてくる。縄文最大級ともいわれる遺跡は、広葉樹林の緑深い林の中にひっそりとたたずみ、それと知らない車上の人は何事もないかのように通り過ぎていく。

しかし、青く控えめな看板に誘われて駐車場に車を止め、林の中の小道を抜けると、忽然と現れ眼前に立ちふさがる巨大な土の壁に人々は圧倒される。国指定史跡 キウス周堤墓群。それは、今からおよそ三二〇〇年前、縄文後期に造られた集団墓地だ。当時、この地域一帯を生活圏としていた縄文人たちが、石や木を素材とする質朴な道具を使い、気の遠くなるような時間と労力を注ぎ込んで築き上げた巨大な構築物だ（図1、写真1）。

広さおよそ五万平方メートルの指定地の内に、八つの周堤墓をはっきりと確認することができる。その大きさは、周堤を含む直径が一八メートルから七五メートル、周堤上から竪穴底まで一・五・四メートル、積み上げられた土量は最大三四〇〇立方メートル（五八〇〇立方メートルの試算もある）に達すると試算されている。竪穴内部に複数

の墓穴があり、墓の位置を示す立石を伴っていると考えられている。

周堤墓の造営方法は次のとおりだ。まず周堤墓を造る場所を確保する。そのためにはまず、今よりも圧倒的に広く、深い大原始林を切り倒し、根を掘り起こし、運び出すことから作業が始まっただろう。数万平方メートルの広大なエリアを確保するためだけでも、膨大な時間と労力が費やされただろうことは想像に難



図1 キウス周堤墓群



写真1 キウス周堤墓群1号周堤墓
(北海道埋蔵文化財センター)

くない。その後は丘陵西斜面の整地である。キウス周堤墓群とその周辺の地図を見ると、遺跡が残されたエリアは特に傾斜が緩やかになっていることに気がつくだろう。これは、原始林を取り除いた構築予定地の馬追丘陵寄りの斜面を削り、西側一帯に盛り土を施した結果にほかならない。このように、周堤墓構築前の作業が本體工事をはるかに上回る大土木事業だったともいえる。

それが終わると、おそらく縄の両端に棒をくくりつけたもの(コンパス)を用意し、周堤墓の中心点に一方の棒を立て、もう一方の棒で丸く円を描くことにより周堤内側の竪穴を設定するが、これはとても重要作業だったと思われる。というのは、造営計画の初段階において、どれほどの規模の周堤墓を造るかが決められており、この竪穴の規模の設定が、そのまま周堤墓の規模、さらにはどれほどの人がここに眠ることになるか、が具体的に示されることになるからだ。周堤墓内径、すなわち竪穴の直径が一六呎から四〇呎という数値は、

どれほどの時間と労力を造営に注ぎ込めるかを示すのではなく、ここに眠ることとなる縄文人の数が予定されていたことを示すことにはかならない。ひとたび造営作業がスタートすれば、その大きさを後になつて変更することは不可能だ。

ところで、三四〇〇立方呎という土の掘削と移動、堆積という一連の行為は当時どれほどの時間を要し

ただろう。われわれが発掘調査費用を試算するときには、発掘する面積と地上からの深さ、つまり土の総量を考慮しなければならない。実際には、前もって行う試掘調査によって、遺構の検出頻度や単位堆積あたりの遺物出土数、土壌が掘り易いものか、あるいは粘土状か泥質状か、湧水の有無などの要素も勘案する必要があるが、ここでは成人男性が一日にどれほどの量の土壌を動かすことができるかに限定してみよう。

通常の土壌を人が一日で移動できる量は一立方呎である。三四〇〇立方呎の土壌を動かす場合、一〇人の成人男性ではほぼ一年かかることになる。ここでも「スコップや一輪車などの『現代的な』道具を使って」という条件がつくが、さらに総量五八〇〇立方呎という試算の最大値を当てはめると、何とあしかけ二年の作業ということになる。

本州以南の人たちには想像できないだろうが、千歳地域では初冬から早春にかけては、寒冷のために土壌が凍上することから地面の掘削は不可能だ。千歳市で発掘調査を計画する場合、実際の調査期間は五月の連休明けから十月末までだ。つまり、土壌を動かす作業の第一段階が「掘る」ことである限り、一連の作業は一年の半分、すなわち半年ほどの時間しか許されないことになる。そうであれば、一〇人の男性が2号周堤墓ほどの遺跡をつくりあげるには、あしかけ二年から四年の歳月が必要となる。これは、あくまでもこれらの男性が周堤墓をつくる作業に専従しての話だ。縄文の集落の実際の規模はわかっていない。多くの竪穴住居がみつかったも、同時に何軒のイエが集落を構成していたかは実はなかなかわからない。また、各々のイエの構成員の内訳もわかっていない。

アイヌの人々の集落である「コタン」を参考にすれば、数軒が妥当なところだろう。しかし、そうであるとしても、一つの集落で成人男性一〇人を周堤墓の造営に専従させるという条件は現実的ではない。また、狩猟採集を主たる生

業としていた縄文人の「椽ぎ頭」を、集団墓地造営に半年なりとも専従させるという条件もまた無理があるだろう。

ここから、周堤墓の造営は単一の集落の構成員によるものではなかったであろうという仮説が導かれる。これほどの巨大な構築物をつくり、それができた要因の根源はここに垣間見ることができるとは後述する。

キウスという地域

千歳の古代の人々の痕跡は、最終氷期最寒冷期である二万二千年前の後期旧石器時代に遡る。千歳地域の基盤は、およそ四万二千年前の旧支笏火山の大規模な噴火活動がもたらした膨大な降下軽石や火砕流堆積物が形成した火山灰台地である。二万八千年前になると季節風的作用により火山噴出物が河川沿いに二次堆積して多くの内陸古砂丘を形成した。丸子山遺跡、祝梅下層遺跡三角山

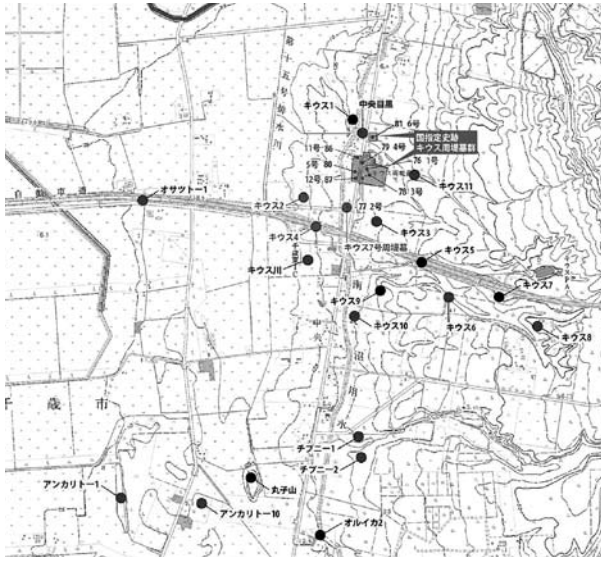


図2 キウス川・旧長都沼東岸の遺跡群

地点、柏台1遺跡の出土遺物は、古砂丘の頂部に残るおよそ二万二千年前以降の北海道最古級の石器群である。氷河期終了と前後して縄文時代の幕が開き、千歳においても縄文早期から晩期の遺跡が市内各地に残された。美沢川流域では一九七〇年代

後半にはじまる新千歳空港建設の際の発掘調査によって、縄文早期から近世にいたるまで人の集住がくり返された場所であることが明らかとなった。

長期に維持された遺跡は、内別川流域のウサクマイ遺跡群、祝梅川流域や長都川流域、キウス川流域・旧長都沼東岸である。千歳川流域には縄文時代以降、多くの人々が集住し文化を育んだことを示す二五〇カ所に達する遺跡が良好な状態で残されている。

長期にわたって人々が集住したキウス川流域・旧長都沼東岸は、周堤墓の集中するエリアでもある。「キウス」はアイヌ語の「キ・ウシ」（カヤがたくさん生える場所）を意味する。馬追丘陵の西の裾ではキウス川をはじめ多くの小河川が西流し、長都沼（オサツ・トー）や馬追沼（マオイ・トー）に流入していた。かつて千歳川（シコツ川）は長都沼から北流して石狩川に合流しており、日本海海域から回帰するサケ・マス類、丘陵のナラ類、カシワ、シラ



写真2 長沼町幌内神社境内の立石

カバなどの落葉広葉樹が育む堅果類、渡り鳥や広葉樹林が育む多種の動物などの食料資源に恵まれたと考えられる。この地域には人々が集住し、多くの遺跡が残された。周辺には7号周堤墓、キウス4遺跡など周堤墓を含む大規模な集落が分布している。キウス周堤墓群の南に位置するキウス4遺跡は、北海道横断自動車道（千歳・夕張）と千歳東インターチェンジ建設工事に

伴う埋蔵文化財確認調査によって広大な勾蔵地が確認され、平成五年から十年にいたる発掘調査によって、縄文後期の周堤墓・盛土遺構・道跡・水場遺構・貯蔵穴・居住域などが確認され、規模の大きな集落が長期間にわたって維持されていたことが明らかとなった。新たに確認された周堤墓は二〇基にのぼり、規模や墓穴形状、副葬品の内容やその時間的な変化が明らかにされた。

集落と周堤墓を結ぶ墓道の南北の長大な盛土遺構では、何層もの焼土層が確認され、朱塗りの土器や土偶、北海道には生息しないはずのイノシシ骨（トロフィーのような大型のオスの頭蓋骨も含まれる）、大量のサケ骨、栽培種子などをともなっており、ここで祭祀や葬送の儀礼がくり返し執り行われたものと考えられている。儀礼の場としての盛土と周堤墓は、葬送儀礼と埋葬という一連の葬送行為の場としてセットととらえるべきものかもしれない。

また、キウス周堤墓群の北北東五^五に所在する長沼町幌内神社では、複数の立石（メンヒル・町指定文化財）が保管されている（写真2）。キウス川や長都沼に面する周辺一帯は、周堤墓が集中する非常に特異な地域といえる。

なぞの構築物

キウス周堤墓群がどれほど以前から知られていたかは、かならずしも明らかではない。しかし、千歳アイヌと石狩アイヌの戦いの時に、相手方や自分たちが立てこもった砦（チャシ）として使われたことが口承文芸の中に伝えられてきたことから、考古学上のアイヌ文化期のいずれかの時期には、その存在が認識され、また不可思議な構築物としてとらえられていたものと思われる。

遺跡の所在地である千歳市中央やその周辺地域には、道東道や道央圏連絡道路およびその関連施設建設の事前調査、開発事業などによって、周堤墓以降の時期も人々が集住したことを示す痕跡を多々認めることができる。しかし、先史時代におけるキウス周堤墓群の損壊や、後に隣接して遺跡が残されることな

どはなく、この巨大構築物が放棄された後の縄文期やそれ以降においても、その巨大な存在とともに特殊な性格が古代の人々に意識されて続けたことを伺い知ることができる。

しかし、それも時の流れとともに次第に忘れ去られ、千歳アイヌの口承文芸などから、あるいはアイヌのチャシではないか、という漠としたイメージが伝えられたのであろう。

キウス周堤墓群に研究者の調査が入るのは、明治・大正の近代を待たなくてはならなかった。

郷土史研究者である河野常吉は、明治三十四年（1901）、大正六年（1917）、大正十一年の三度にわたり、研究者としてはじめてキウス周堤墓を訪れて調査を行った。大正七年刊行の『北海道先史時代遺跡』には、五基の周堤墓の見取り図が記録されている。また、大正十三年刊行の『北海道史蹟名勝天然紀念物調査報告』には、周堤墓がアイヌの砦跡（チャシ・コツ）とする伝承を紹介している。

同時代の多くの研究者と同様に、河野もまたキウス周堤墓をアイヌの砦であるとしてとらえられていたのである。

同時期、やはり郷土史家である阿部正巳もキウス周堤墓群を訪れている。その規模の雄大さに感銘を受けつつも、誰による構築物かは不明。アイヌのチャシとも異なるとの見解を示している（阿部1919）が、はるか先史時代の遺跡との判断にはいたらなかった。なお、阿部は1号周堤墓の中心を発掘している。

日本文化の源流と、アジア文化の広がりや古層を求めて東アジア全域を踏査し、膨大な調査記録と写真映像を残した人類学者である鳥居龍威もキウス周堤墓群に言及している。鳥居は、七世紀から十世紀にかけて満州からシベリアのツングースが、北海道の石狩川の流域や西部に植民を進めていたと考えてい

た。彼らが、北海道の先住民族であるアイヌとの戦闘に備えて各地に要塞を築いたが、キウス周堤墓群もその一つと位置付けた。周堤墓が和人やアイヌの構築物とはまったく様相を異にすること、ひるがえって、北満州、特にシベリアの沿海州の要塞と「一致」していることをその根拠とした(鳥居1919)。およそ奇想天外ではあるが、周堤墓をシベリア東部から日本を含む広い範囲の諸民族の歴史の中でとらえようという考察の大きさは鳥居の面目躍如といえるだろう。

さらに、陸軍少将原田二郎は、昭和十年(1935)キウス周堤墓群の測量調査を実施し、詳細な観察記録を残している。6号周堤墓の第一発見者でもある原田は、チャシなどの軍事施設の条件にそぐわないこと、周堤墓をクマ祭と結びつけた動物捕獲用施設説ではないか、などの見解を提示した。

このように、キウス周堤墓群をアイヌのチャシ(砦)としてとらえる説(立地や形状などに問題ありとはしているが)をはじめとして、遺跡の正体に関するいくつかの解釈が与えられながらも、踏査や試掘調査による情報に基づく解釈にとどまり、この遺跡は昭和の時代を迎えるまで依然としてなぞの構築物であり続けた。

昭和五年(1930)には、なぞの遺跡キウス周堤墓群は、史跡名勝天然紀念物保存法によつて『キウスのチャシ』として仮指定を受けることとなった。昭和二十三年(1948)に、河野常吉の子息である広道は、知床斜里の朱円(粟沢)遺跡の発掘調査を行った。それは、高さ五〇〜六〇センチの土手が直径三〇メートルの円をつくり、中に複数の墓があるというかつて誰も見たことがない遺跡だった。河野は、土の垣根が環状に巡るといつかつて誰も見たことがない遺跡「環状土籬」と命名した。同時に、墓にともなった土器が縄文後期末から晩期初頭のものであることから、環状土籬が当該期の遺跡であることを明らかにしたのだった。

河野は、その翌々年の昭和二十五年、キウス7号周堤墓を調査している。これは、キウス周堤墓群南方の畑から立石(周堤墓の墓標)が発見されたことが契機となったものであるが、7号周堤墓内の一基の墓穴を発掘するとともに、周囲にやはり土手が円形に巡ることを踏まえて、この遺跡も環状土籬であると

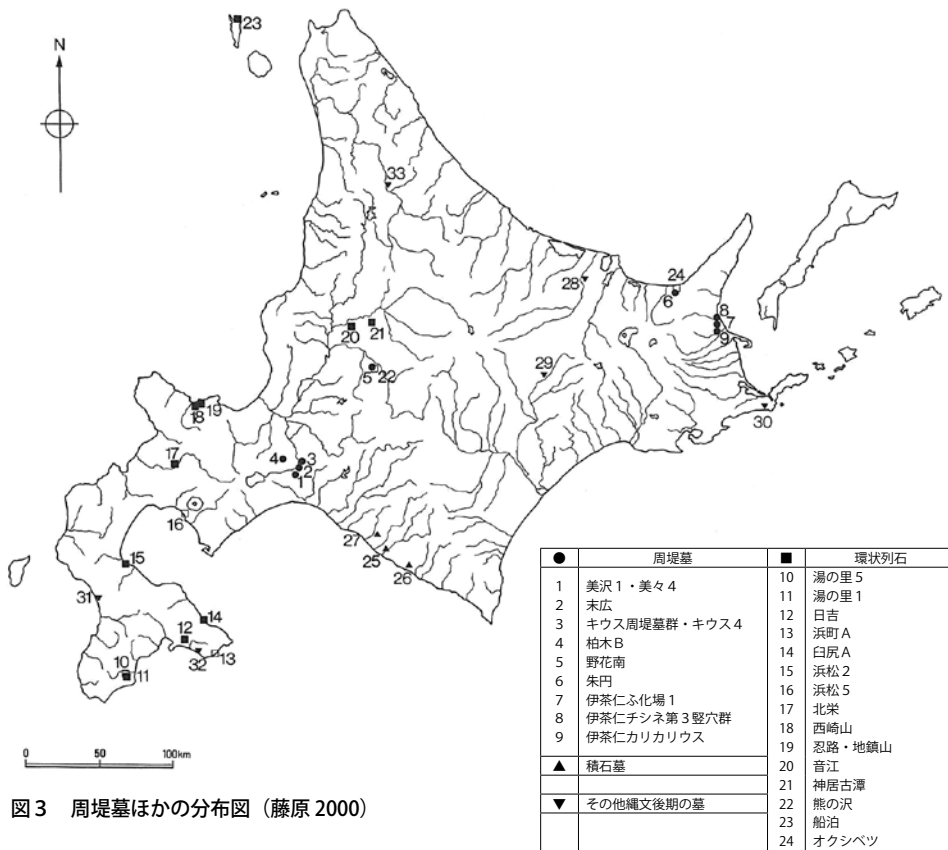


図3 周堤墓ほかの分布図(藤原2000)

考えたのだった。しかし、残念なことに、この調査の成果が正式に報告されることはなかった。

キウス周堤墓群の初めて本格的な調査のメスが入ったのは、昭和三十九年（1964）と四十年のことだった。北海道大学医学部講師の大場利夫と千歳市内小学校校長であった石川徹が中心となり、千歳市教育委員会職員、千歳高校や地元中央小学校職員や生徒、陸上自衛隊隊員など多くの千歳市民が協力し、1号と2号周堤墓にトレンチを入れた。

1号周堤墓では中央付近に五基、2号周堤墓では一基の墓穴が確認された。また、出土した土器の特徴や、土手（周堤）の上に二五〇〇年前の樽前山の噴火の際の降下物が堆積していたことから、キウス周手墓群の構築が縄文後期であり、同時に集団墓地であったことを初めて明らかにしたのだった。ここにおいて、長年なぞの構築物であり続けた周堤墓のベールがはがされる

こととなった。

周堤墓の分布と立地

現在までに確認されている周堤墓は六九基ともいわれ、その分布は北海道に限定される。

つまり、周堤墓という遺跡（形状と集団墓地としての性格、という意味で）は、国内のみならず世界のいかなる地域にも存在しない。周堤墓は北海道に固有の構築物なのだ。

さらに、その分布は石狩低地

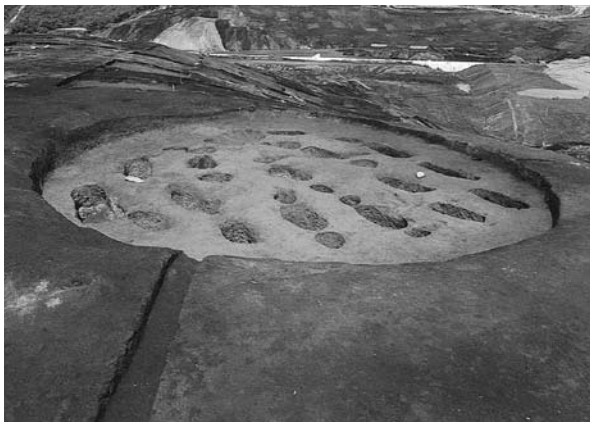


写真3 美沢1遺跡JX-3周堤墓
(北海道埋蔵文化財センター)

帯中南部に大きく集中する。道内の他地域では、空知若別、知床斜里、根室標津に点状に分布するにすぎない。一方、千歳を中心とする石狩低地帯中南部では五五基を数え、全数の八割以上が集中するという強い偏在性がある。このことから、周堤墓は石狩低地帯中南部の千歳地域で発生したと考える研究者も少なくない（図3）。

その分布状況は、藤原によって次のように簡潔にまとめられている（藤原2000）。

石狩低地帯中南部

①美沢川流域の遺跡群（新千歳空港建設にともなう事前発掘調査）（写真3）

昭和五十三年（1978）に苫小牧市美沢1遺跡及び千歳市美々5遺跡で七基、五十五年千歳市美々4遺跡で三基、五十八年に美々4遺跡で五基、六十年に美々4遺跡で一基、総計で一六基（美沢1遺跡六基、美々4遺跡九基、美々5遺跡一基）となり周堤墓の一集中域を呈している。

周堤墓は美々川支流の美沢川に臨む左右の河岸段丘上平坦部、標高二三〇～二五〇付近にあり、美沢川との比高二〇以上という。規模の格差、単独と併存・集中などさまざまなバリエーションがみられる。

②千歳市末広遺跡

昭和三十八年（1963）に始まる分布調査によって周堤墓の存在が確認。五十四年から五十六年の発掘調査によって三基が調査された。標高一三〇の千歳川左岸段丘にあり、川との比高は三以上。

③千歳市キウス周堤墓群、キウス4遺跡

標高一二〇以上の馬追丘陵の西緩斜面に位置する。キウス4遺跡で標高一〇～一七以上、キウス周堤墓群一七～二〇以上。ここに三三基もの周堤墓が集中する。

④千歳市丸子山遺跡

馬追丘陵西裾の段丘から離れた独立丘上に位置する。この独立丘は、支笏火

山の降下火山灰が風成二次堆積した古砂丘である。標高二二^尺、周囲との比高二二^尺。平成二年(一九九〇)から五年までの調査によって二基が調査されている。

⑤ 恵庭市柏木B遺跡

大正十五年(一九二六)、国産振興博覧会に墓穴の立石一点が「嶋松のメソヒル」として紹介される。昭和五十二年(一九七七)から五十五年にかけて三基が調査され、さらに二基の存在が推測されている。標高が六〇^尺、茂漁川左岸の尖端段丘上に立地する。柏木B遺跡の周堤墓では、墓標立石や円礫堆積(ケルン)などが認められること、周堤上にも墓穴が造られていることなど特徴的な要素が少なくない。

空知芦別

⑥ 芦別市野花南環状土籬



写真4 朱円状土籬

昭和二十八年(一九五三)に確認され、その後調査が実施。空知川左岸段丘上にあり、標高二二〇^尺、川との比高一六^尺。明らかな周堤墓は一基であるが、他に一基の存在が推定されている。

知床斜里

⑦ 斜里町朱円環状土籬(写真4)

昭和二十三年(一九四八)、河野広道による調査。斜里市街地からウトロ方向に七^キ、オクシベツ川とアツカンベツ川に挟まれた丘陵上にA・Bの二基が遺されており、標高

一六〇一七^尺。Aに二基以上、Bに一基の積石墓(これをストーンサークルと呼称)があるとされる。このうち、河野によって調査された墓穴は七基と考えられている。三体以上の合葬や織物の断片をともなう火葬墓がある。構築時期は縄文晩期初頭の御殿山式期とされ、周堤墓から積石墓(静内町御殿山墳墓群など)への移行を伺うことができる。

根室標津

⑧ 標津町伊茶仁ふ化場第1遺跡

昭和三十八年(一九六三)に一基が確認され、昭和五十三年調査。伊茶仁川の支流に挟まれた段丘上に立地。標高一四^尺、川との比高三^尺。

⑨ 標津町伊茶仁チシネ第3 竪穴群遺跡

昭和五十九年(一九八四)確認、平成九年調査。伊茶仁川と忠類川の間の小河川右岸に立地し、標高九^尺、川との比高二^尺の低い段丘上に立地。段丘縁にそって五基あり、墓穴内に墓標を確認している。

⑩ 標津町伊茶仁カリカリウス遺跡

無名川第二地点に一基ある。ポー川支流、無名川の右岸段丘先端の緩斜面に立地。標高九〇一^尺、川との比高六^尺。平成六年(一九九四)に測量調査。ほかに、ポー川上流のカリカリウス川第一地点に、直径一〇^尺ほどの円形の竪穴があり、周堤墓の可能性がある。標高一五^尺、川との比高一〇^尺。

周堤墓に時間的な変遷を考える際には、以上のような分布の大きな偏りを考慮して、千歳地域を中心とする地域の中において論を進めることが自然だろう。

北海道横断自動車道と千歳東インターチェンジの建設にともなう事前調査が行われたキウス4遺跡を例にとると、ここにおける最初期の周堤墓は縄文後期後葉の堂林式期古段階に現れる。その規模は外径が一〇^尺、内径六^尺、竪穴の深さ一〇^尺と小型で、周堤は不明瞭という。また、墓穴は一〜二基と少ない。

堂林式期、堂林式期新段階と時期を下るにつれて、外径が三〇センチを超えるなど周堤墓の規模が拡大するという（藤原2000）。同時に、

・墓八の数、墓穴内の赤色顔料（ベンガラ）、墓標、墓穴の内側から出土する遺物が増える。

・墓八の幅が広がる。

・丸みが強い形状に変化する。

などの現象が伴うことも指摘している。このように、キウス4遺跡の周堤墓は、規模の大型化とともに、付帯する施設や出土遺物の特徴が変わっていったことが確認された。

さらに、その延長にキウス周堤墓群が位置付けられ、キウス周堤墓群の造営は次の段階である三ツ谷式、御殿山式段階と考えられている（大谷1978）。この文脈においては、周堤墓という墓制は、キウス4遺跡における最古段階の周堤墓にはじまり、最大に大型化したキウス周堤墓群をもって終末を迎えることとなる。

大谷は周堤墓を五期に分類し、前半三段階の堂林式期をキウス4遺跡における変遷に充てている（大谷2010）。第四段階は後期末葉三ツ谷式期であり、美沢1遺跡や柏木B遺跡がこの時期にあたる。最後の第五段階は、縄文後期終末から晩期初頭の御殿山式期（斜里の栗沢式期）であり、キウス2号周堤墓、朱円環状土籬が相当するとしている。キウス1号周堤墓もこの時期の造営と考えてよいだろう。

キウス周辺の周堤墓の時代的な変遷は、およそ以上のように考えることができるだろう。

一方の集中地である美沢川流域ではどうだろうか。美沢川流域では、新千歳空港の建設に伴う事前調査によって、苫小牧市美沢1遺跡、千歳市美々4・5遺跡などで一六基の周堤墓が確認されている。

美沢1・美々4遺跡に注目してみよう。ここでは、外径二三センチから二六センチの周堤墓が一五基ほど見つかったっており、特に美沢1遺跡では六基が二基ずつ対となる特徴的な立地を示している。また、これら周堤墓の他に、テーブル状に掘り残した墓穴中央のまわりに幅三・五センチほどの溝をめぐらし、さらにその外側に周堤をもつ周溝墓（環状溝墓）と呼ばれる墓地遺構がある。周溝墓は周堤墓よりやや新しいともいわれる（矢吹・野中1985）が、明確な時期の差は認められない。

周堤墓はどこから

すでに述べたように、周堤墓は同じものが他の世界のどこにも存在しない北海道固有の構築物である。その周堤墓は、過去のいかなる遺跡とのつながりなしに、縄文後期後葉を待つて突然出現したのだろうか。ふつうそのようなことは考えにくい。そこに環状列石（ストーンサークル、環状石籬）を考慮する理由が生まれてくる。

環状列石というよりストーンサークルという言葉ほど、世界的に知られている考古学用語はないだろう。イギリスのストーンヘンジ、エイヴベリーなどはその代表だ。私たちは「ストーンサークル」という言葉を聞くと、誰もが無条件に巨石が環状に並べられた神秘的なシーンを即座にイメージできる。

そのストーンサークルは「環状列石」という名称を与えられて日本にもあり、東日本では縄文前期・中期に現れる。東北北部から北海道では、縄文後期前葉から中葉にかけて大きな規模の環状列石が造営されるようになる。

あらためて環状列石を説明しよう。これは、礫（多くは大型の川原石や角礫）を円形あるいは角丸方形形状に配列したもので、その規模や形状はさまざまである。また、内部にも配石と呼ぶ礫の集積や配置があり、その下には墓八が掘られて遺体は副葬品が認められる場合もあるが、墓を伴わない環状列石もある。

り、その性格は画一的ではなくさまざまなものだったろう。

東北地方で古くに発見され、もとも知られている環状列石に、秋田県鹿角市十和田の大湯環状列石がある（写真5）。縄文後期前半の大湯環状列石は万座環状列石と野中堂環状列石の二つの環状列石をはじめとして、配石遺構や柱列、環状列石を取り囲むように配置された建物跡などを含む総称である。

昭和六年（1931）に水田の水路掘削工事で発見された。万座は直径四八呎、野中堂は直径四二呎の大きさで、それぞれの内側に小型の環状列石をもつ二重円環構造である。内外の配列は、実は直径一〜二呎の配石を一単位として、万座・野中で二〇〇基以上が集合して円環を成している。ストーンヘンジのように、一つ一つの巨石が円状に配置されるのとは異なる構造だ。



写真5 秋田県牡鹿市大湯環状列石（左：万座、右：野中堂）

これらの配石は、中央に一本の立石があるもの、複数の立石できているもの、石を葺いたもの、方形の組石であるものなど、さまざまな形がある。これら配石の下には墓がつくられていることから、形状のバリエーションは被葬された個人（あるいは家族）を判別させるものだったのだろう。使用された石は七二〇〇以上、最大で一個二〇〇キにもなる。これは、石英閃緑岩という緑色の石で、遺跡の東北東七キロの安久谷川から運ばれてきたものだ。

このように万座、野中堂の環状列石は個々の墓が単位となって全体を構成する。サークルの規模は円環構造を維持するため（完結す

るため）に、当初から規模が計画されたのだろう。直径五二呎と四四呎の相違は単なる結果ではないようだ。

集団墓地としての大湯環状列石だが、この遺跡はさらに付帯機能をもっていたと考えられている。日時計状組石と呼ばれる配石が万座・野中堂の双方にある。二つの環状列石の中心点を結ぶ直線上に日時計状組石が位置し、さらに直線の一方が夏至の日没を指している。日時計状組石の立石の影は、時間毎、季節毎に変化し、このことから縄文人が二至二分（夏至・冬至・春分・秋分）や時間と季節の概念をもっていたともいわれる。この概念は、狩猟採集の生業にとつて必要であるが、この環状列石においては儀礼や祭祀に関連する機能を付与されていたと考えるべきだろう。



写真6 青森県青森市小牧野遺跡

では、環状列石は集団墓地なのだろうか。縄文後期中葉の青森市小牧野遺跡は、八甲田山系から青森平野にのびる舌状台地上にある（写真6）。

緩斜面をなす台地の山側を削り、低位面に押し出すことで平坦な面をつくり、環状列石は二重三重の円環構造を呈する。この環状列石は、大湯環状列石のような個々の墓で構成されるものではない。配石は環状列石全体を構成するため

がつて集団墓地ではない。墓域は環状列石に隣り合う台地の縁に広く確認されているのだ。

では、直径三五坪の外帯、二九坪の内帯と直径二・五坪の中央帯という円環構造は何を目的とした施設か。もちろん集住する場所ではない。現時点では、さまざまな祭祀や儀礼を執り行う聖なる場ととらえられている。平坦面の作出にはじまるその造営は、規格や形状、配石の個々の形にいたるまでの周到に計画のもとに造営が進められたのだろう。

北海道にも環状列石はある。道南の知内町湯の里5遺跡、森町鷺ノ木遺跡、道央の小樽市忍路、小樽市地鎮山、余市町西崎山、ニセコ町北菜、空知の深川市音江などで、縄文後期初頭あるいは前葉から後葉までに造営されたと考えられている。これらは、音江のような集団墓地や、鷺ノ木のように墓を伴わず祭祀や儀礼の場と考えられる環状列石である。

東北地方においては、青森県弘前市の大森勝山遺跡の環状列石のような縄文晩期の例がある。このように東北では、集団墓地あるいは祭祀・儀礼の場である環状列石の造営は縄文後期から晩期まで続き、さらに岩手県 御所野遺跡を考慮すれば、縄文中期以降の長い環状列石の伝統を指摘できることとなる。

ところが、北海道の環状列石は東北と同じ道をたどらない。北海道の環状列石の伝統は、後期後葉になるとにわかに終焉を迎えてしまうのだ。そして、キウス周堤墓群をはじめとする周堤墓という構造を異にする集団墓地が、環状列石時代の終わりを待っていたかのように出現する。さらに、その出現は環状列石が造営された地域を避けるかのようだ。周堤墓がつくられる地域は狭く、限定的ではあるが、そこはかつて環状列石が造営された地域ではない。时期的に前後する二種類の「集団墓地」「祭祀・儀礼の場」は、このように系統的にとらえることが難しい。東北地方で縄文晩期にまで環状列石の伝統が維持されることそのことを示している。

環状列石は東北においても北海道においても、丘陵の頂部や高い尾根上につくられることがふつうであり（大谷1975）、ランドマークとしての機能をもつ構築物であり、それを担った人々の集落とは地理的に隔絶している。

しかし周堤墓はそうではない。キウス周堤墓群やキウス4遺跡、朱田環状土籬などは丘陵の裾野、標高二〇坪をこえない緩斜面や低地につくられており、キウス4遺跡の例にみられるように、帯状の盛土遺構を介してより低い立地環境の集落と密接に結びついた構造がある。美沢川に削られた台地上の美沢1遺跡や美々4遺跡においても、川との比高はやはり二〇坪以下であり、川に近い場所を確認された遺物集中地点に集落があったと考えられている。

「環状列石をはじめとする配石遺構は周堤墓と分布・立地が一致せず、住居跡との位置関係などからも周堤墓とは直接的に結びつかないと思われる、その系譜関係はより慎重に考える必要がある。」（藤原2000）や、「（略）両者（周

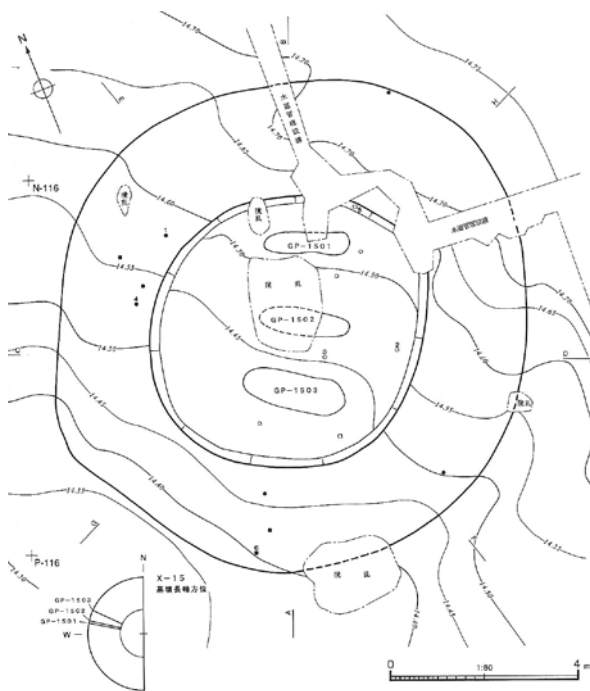


図4 キウス遺跡 X-15周堤墓
(北海道埋蔵文化財センター)

堤墓と環状列石・筆者)の関係は後者から前者へと系統的に発達したとは考え難い状況である。そこに一つのアポリア(当惑・疑念・筆者)が横たわっている(小杉2013)などは、時期的に前後する環状列石と周堤墓を墓地、墓域といった遺跡・遺構の性格のみをキーワードとする単純な系統論に押し込めようとするこのリスクの高さへの警鐘となっている。

再び周堤墓、そしてキウス周堤墓群

周堤墓は、なぜ・どのようにして生まれたのか、疑問は深まるばかりだ。ここでは、あくまで試論として考えを進めてみたい。まず、いくつかのキーワードとセンテンスを再考してみよう。

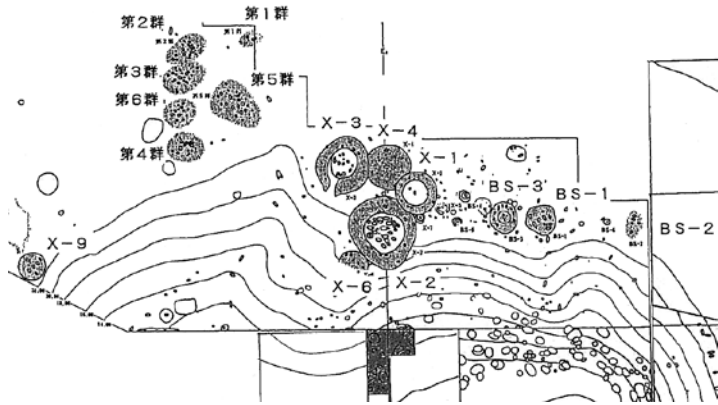


図5 美々4遺跡の周堤墓、土壌墓群(第1~6群)

①周堤墓の規模 小型から大型へ
 ②円い周堤墓 ③墓(墓域)の意識
 ④周堤の出入り口 ⑤墓穴の標識(墓標) ⑥墓穴の形と体位
 周堤墓は、死後の世界の住み家としての竖穴住居を意識して構築された、という見解が示されたことがある(大塚1979、春成1983)。このことは、後のキウス4遺跡において、遺跡内の周堤墓の変遷、周堤墓を担った人々の集落のあり方を把握することによって、事例に基づく言説が

展開されることとなった(藤原1999・2013など)。

既述のように、キウス4遺跡の周堤墓の初現は堂林式古段階であるが、周堤外径一〇以前後、内径六以ほど、竖穴の深さは一〇以にすぎない(図4)。周堤が一部途切れる出入り口はみられない。

長軸一〇以の長円形の墓穴が一〇三基、副葬品はほとんど伴わない。長軸一以の墓穴は子ども墓と考えられている。

これら第一群から、後期末葉三ツ谷式期から晩期初頭の御殿山式期にあたる第5群キウス周堤墓群まで、周堤墓の規模が拡大し、それに伴う墓穴数、墓穴形状、副葬品の数・種類の変遷についてはすでに紹介した。

美沢川流域美々4遺跡では、X・5・X・7からBS・1・3、さらにX・1・4・6が造営されていることが台地上における位置取りから読みとれないだろうか。大型のX・1以降の周堤墓は、後期中葉の土壙墓群と小規模な周堤墓の間のスペースにあたかも押し込まれたように造営されている。このことは、

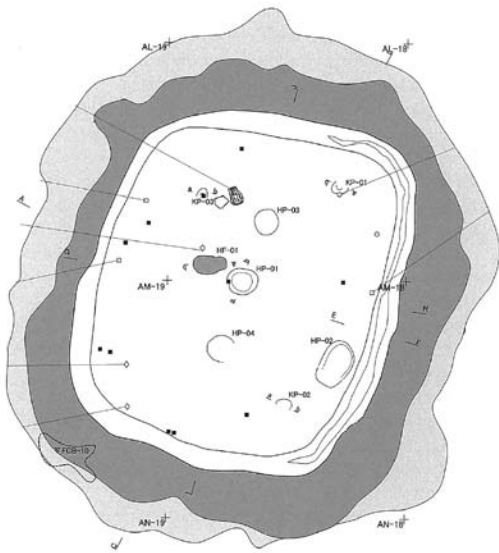


図6 厚真町のヲチャラセナイ遺跡1号竖穴(VH-01)(竖穴の周囲の濃淡のアミが堀り上げ土(天方・乾2013))

美々4遺跡においても周堤墓は小型から大型化したことを示していると考えておく(図5)。

キウス4遺跡の最古段階の周堤墓は、小規模であること、竪穴の掘り込みが浅いこと、出入り口がみられないこと、墓穴が少ないこと、子どもの墓があることなどの特徴から、周堤墓は一住居に住む者(世帯)の墓地としてつくられはじめたものであり、それは同時期のイエ(竪穴住居)をモデルとしたと考えられることは妥当だろう。それは「世帯の相対的自立性の強化(林1980)」であったのかもしれない。

初期の周堤墓の周堤は低いといわれるが、実はイエにも周堤がある(図6)。私たちは「竪穴住居」というものは、単に地面に壁が垂直の穴を掘り、そこに屋根をかぶせた居住施設と思いがちだ。しかし実際には、竪穴を掘ったときの掘りあげた土が穴の周囲に円く積み上げられている。

特に、縄文の竪穴は円いことから、周囲の土手も同様に円くなる。これは、周囲の地表面より竪穴の縁を高くすることによってイエの中に雨水などが入り込まないようにするためとも考えられている。したがって、イエのまわりの土手はさほど高い必要はない。また、竪穴の出入り口の場所は周囲の土手の形状には反映されていない。縄文の住居の出入口の場所もわかっていない。

この世のイエという一定程度の広がりや空間をもつ施設は、このようにしてあの世の住み家にも一定の広がりを持たせることに結果した。すなわち「墓域」という意識である。初期の小型周堤墓の周堤が低いこと、後に大型化する周堤墓にある出入り口が明確でないことなどは、周堤墓が一つイエに住む縄文人の世帯の墓域としてつくられはじめたものであることを物語っているだろう。

そもそも、墓をつくり、丁重に亡きがらを埋葬し、なにがしかのモノ(副葬品)を持たせる一連の行為は、この世の命は死をもって霧消してしまうのでは

なく、死後の世界を生き続けるという死生観に裏打ちされている。人間にとって死は大きな問題であるが、それが終わりではなく、次の生への入り口であると考えられること、それが「再生」という観念であり、縄文後期におけるその具現が、周堤墓というあの世のイエであった。

このように、縄文人にとってイエは、この世の生の営む場所であると同時に、死後の生を営む場所として概念化されていた。大島は、北海道の縄文期の火災住居が多いことに着目し、縄文中期以降、故意に住居に火を放っていたらしいこと、これがアイヌのカスオマンテ(チセ送り儀礼)に結びつくと考えた(大島1994)。アイヌが住居(チセ)を焼くのは、死後に生きる死者に住み家をもたせるための神聖な送り儀礼なのである。

縄文人は、この世の死者が死後の世界に再生し、死後の生を生きると考えていた。あの世で生きる死者のために、一つにこの世で焼いたイエを持たせること、そして後期後葉には墓(墓域)をあの世の住み家としてつくり、死者を内部に埋葬することによって死後の生を営む場を提供したと考えたい。イエや周堤墓が円であることについて、大島は生命が宿る子宮を再生のシンボルとしてとらえたことが根源にあり、それを大地に具体化させたからだという(大島2013)(註1)。

以上が、周堤墓成立のシナリオだったのではないだろうか。このように考えてくると、周堤墓と環状列石の関係性はかなり希薄なものであることがあらためて理解されるだろう。大湯環状列石は集団墓地ではあるが、個々の墓(配石)が全体として円環構造を形成しているのであり、墓域という意識は周堤墓とは大きく乖離している。他の環状列石をも考慮すれば、そこは「祭祀や儀礼の場」に重きが置かれた記念物であったといえるだろう。

周堤墓は「在地的な土器である縄文地に沈線文が施された堂林式土器を用いた集団により、道央部で発生したきわめて北海道的な墓制(藤原2007)」

という見解が妥当だろう。特に千歳及びその周辺地域が誕生の地であることは、周堤墓の集中度、その古段階の存在などからも首肯されるだろう。

実は、墓域という意識は美々4遺跡の周堤墓に隣接した場所にすでに萌芽がある。美々4遺跡の周堤墓群の一つ上流側の台地上には、縄文後期中葉の墓がある。これらは円形の墓穴が集中し、「土壙墓群」「群集墓」などと呼ばれている(図5)。この土壙墓群には、六つの群としてまとまりをみせること、屈葬が多いが伸展葬も混在すること、墓標の礫やその跡と思われる穴があること、特に第五群では外径一八センチほどに幅五メートルの高まりが認められ、内側の比高は二〇センチほどあることなどの特徴がある。

このことは、縄文後期中葉には墓域の意識が明確であったこと、墓標や伸展葬の存在など、次期の周堤墓につながる要素が多々あることなど暗示的である。千歳および周辺の地域においては、後期中葉の墓のあり方はおよそ美々4遺跡における土壙墓群と同様の状況ではなかったかと思われる。後期中葉の墓域の意識が、次の世帯単位の周堤墓という墓制の発生の背景となったのではないだろうか。

さて、世帯の死後の住み家としてつくられ始めた周堤墓は、その後大型化が進み、キウス周堤墓群の出現をみることとなる。周堤墓の大型化の現象を墓穴の形と数から考えてみたい。

初期の小型の周堤墓では、墓穴の幅が細長く、体をのばして葬る伸展葬が多い。それは、あたかも死後の世界で新しい命を生きる「用意」が整っていることを示すかのようだ(註2)。そこに「限られた世帯(＝相対的自立性の強化)の構成員を伸展する姿勢で葬る」という規制が浮かび上がってくる。当時は、すべての世帯やその構成員が周堤墓に埋葬される立場にあつたわけではなかったようだ。キウス4遺跡で見られる周堤墓の周囲や南北の盛土遺構の外の「土壙墓」の存在は、そのことを示しているのかもしれない。

さて、周堤墓の五期五群分類の三群以降から大型化が進むとともに、円みを帯びた墓穴数が増加することとなる。これは、当初の伸展葬から伝統的な屈葬への変換を示している。最大規模を誇るキウス周堤墓群の1号・2号周堤墓においても、検出された墓穴は楕円形状あるいは小判形である。

最古期の周堤墓が「限られた世帯の構成員」を対象としたものであつたならば、その大型化と墓穴数の増加は、「構成員の範疇」が拡大したことを示している。これは、複数の集落を社会的単位とする紐帯が何らかの要因によって強められたことによるのだろう。

前述のように、キウス周堤墓群1号・2号・4号周堤墓などの構築は、複数集落内の構成員による作業によらなければ到底実現しえないものだ。強い規制であつたはずの伸展葬は、より多くの構成員を埋葬する必要性の前にその意味を次第に失い、最終的には伝統的な埋葬形式である屈葬に収斂した。換言すれば、周堤によって限定された埋葬スペースである竪穴内に、より効率的に多くの死者を埋葬することが求められたということだ。末期の周堤墓とされる恵庭市柏木B遺跡では、すべての墓穴が幅広い形状をなしている(木村編1981)。ここでは、竪穴の内部にとどまらず、後続して周堤の上にも多数の墓が認められており、その墓穴形状の円形化が一層進んでいる。また柏木B遺跡第1号周堤墓では、竪穴の南側の1119・1120・1121号墓上には六〇〇点以上の礫群が認められた。これは、周堤墓に後続する「積石墓」であり、縄文晩期の御殿山遺跡などにみられる。この積石墓は、キウス周堤墓群の2号周堤墓1号墓においても確認されている(千歳市1967)。

なぜ複数の集落の結びつきが強められたのか、それを説明することは必ずしも困難ではない。縄文後期は寒冷化の環境にあつたことが知られている。その環境変動に適応し、河川漁労を主な生業としていた集団が、寒冷化を背景に増加したサケ資源の捕獲や保存のための協業し、それを背景とする共同祭祀の執

行が集落をこえた結びつきの意識を高めたともいわれる（藤原2007など）。

資源増加に起因した捕獲・保存のためのより広い集団の協業・紐帯の強化というシナリオは、資源は自己の消費に限定するというアイヌの自然観・世界観とは相容れないものようにも思われる。しかし、アイヌ文化を構成する三側面の一つである流通経済的側面は、对本州にとどまらず北方地域や大陸との間において広く活発に行われていたとされ、北海道におけるアイヌの流通経済は内的な指向のみではなかった（瀬川2008）。つまり、自己消費にとどまらない生産と交易という生業・経済システムは、和人が北海道に広く立ち入る以前から存在していた。この指向が縄文から引き継がれ、拡大されたと考えることは不自然ではない。動植物資源に事欠かない千歳地域であるが、こと石材は地産の余地がなく、交易によって多方面から入手する必要があった。このことは、市内各遺跡の出土遺物から知ることができる。

長都沼・馬追沼、馬追丘陵から沼に流入する多くの河川、落葉広葉樹林に恵まれた里山など、資源に不足することのない環境が整っていた中で、あえて集落をこえた協業が必要とされる要因があったとすれば、効率的な資源の捕獲と処理、交易・流通システムへの参画であったらう。

まさにここに複数の世帯、集落を社会的単位とする紐帯の強化の必要性をみることができのではないだろうか。その表象が周堤墓群の増築に参加していったことが理解される。そのため壮健な構成員が、自ら周堤墓の増築に参加していったことが理解される。自らが一構成員である世帯や複数世帯から成る集落の存続のために、また、さらに大きな社会・経済的な目的を達成するために、「腹の足し」と同時に「心の足し」を獲得しようとしていたのではなかったか。周堤墓の竪穴内部に埋葬されることは、当時縄文人にとってこの上ない名譽だったに違いないが、埋葬される死者の数が増えることによって周堤墓は大型化する必要があった。同時に、埋葬スペースをより効率的に確保する必要性が高まり、伸展

葬の規制の希薄化が進んだのではないかと考えられるのである。

キウス周堤墓群造営の背景には、キウスや千歳地域、さらには石狩低地帯をこえた広い交易・流通経済の中で、その作業にたずさわる構成員が同じ周堤墓に埋葬され、死後の住み家に生きることが望んだという死生観を伺うことができる。この文脈には祖先崇拜の観念は含まれない。周堤墓では墓穴の石や木の墓標が倒れ、朽ち果てても繕った形跡はない。にもかかわらず、周堤墓という施設そのものは人念にメンテナンスされてきた。このことは祖先の墓を維持・管理することが重要なのではなく、構成員が恙なく周堤墓に埋葬されること、ともに同じ死後の住み家に眠ることこそが第一の目的だったことを示している。

キウス周堤墓群は、効率的な資源の捕獲と処理、交易・流通システムの構築と推進が最高度に達成されたことを示す記念物といえるだろう。その詳細は今後の調査と研究に待たれる。

今なお多くの謎を秘めて、キウス周堤墓群は原始の林の中にひっそりとたたずんでいる。

（註1）縄文人がイエの床に穴を掘り、そこに死者を埋葬して火を放つという行為を行った痕跡が認められる事例も同様に説明されるといえる。イメージとシンボルの解釈を通して縄文の神話的世界観に迫ろうという大島の今後の研究に期待したい。

（註2）アイヌの墓における伸展葬は、同じ考え方によるものである。

引用文献（発行年・西暦とした）

天方博章・乾 哲也 『厚真町 ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡（1）』 2013

大島直行 「縄文時代の火災住居 ―北海道を中心として― 『考古学雑誌』 80巻1号 1994 / 「1北海道」 『講座 日本の考古学 3 縄文時代上』

青木書房 2013

大谷敏三 「『環状土籬』について」『考古学ジャーナル』156 ニューサイエンス社 1975 / 「北の縄文人の祭儀場・キウス周堤墓群」『シリーズ「遺跡を学ぶ」』074 2010

大塚和義 「北海道の墓址」『物質文化』3 1964

木村英明編 『柏木B遺跡』1981

小杉 康 「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について(予察)」『北海道考古学』第49輯 2013

瀬川拓郎 『アイヌの歴史 海と宝のノマド』2007 講談社

千歳市 『千歳遺跡』1967

林 謙作 「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』88巻3号 1980

春成秀爾 「竪穴墓域論」『北海道考古学』第16輯 1983

藤田 登 「鷲ノ木5遺跡の環状列石と竪穴墓域」『考古学ジャーナル』515 ニューサイエンス社 2004

藤原秀樹 「道央部における後期の墓制」『南北北海道情報交換会第20回記念シンポジウム』1999 / 「2北海道における周堤墓の分布・3キウス」

4遺跡・キウス周堤墓群の分類と新旧関係」『千歳市 キウス4遺跡(5)』

2000 / 「北海道の周堤墓」『縄文時代の考古学』9 死と弔い―葬制

―』同成社 2007 / 「北海道の周堤墓」『事典 墓の考古学』吉川弘

文館 2013

北海道埋蔵文化財センター 「第3章 美沢川の縄文村」『遺跡が語る北海道の歴史』

1994 / 『千歳市 キウス4遺跡(5)』2000

矢吹俊男・野中一宏 「縄文時代の墓制・縄文時代後期の区画墓について」『続北海道五万年史』郷土と科学編集委員会 1985

謝辞

本論の作成にあたり、伊達市噴火湾研究所の大島直行氏、北海道庁文化財・博物館課の藤原秀樹氏からは、文献資料や多くの情報の提供を賜った。また、キウス周堤墓群や埋蔵文化財センター常設展示を見学された方々からは、さまざまのご感想・ご意見をいただいております。本論を進めるにあたり有益な助言とさせていただきます。以上の方々に衷心より篤く御礼申し上げます。